

新

歌人群像

柳原白蓮

● 波乱の人生から歌を紡いだ女

● 松平盟子 ●

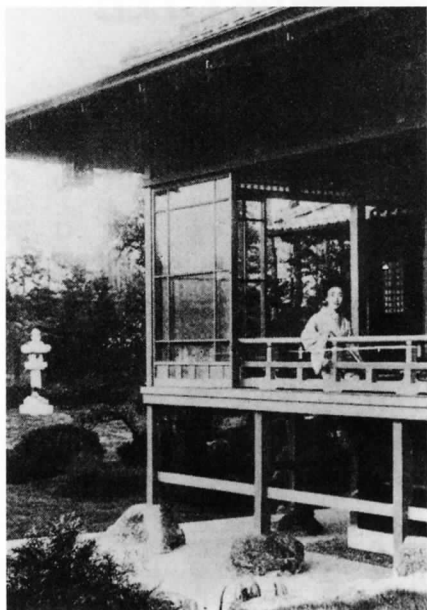


燐子から歌人・白蓮へ

柳原は彼女の父で伯爵・柳原前光の姓。白蓮は雅号、本名は燐子。前光の妹は明治天皇の側室で、後の大正天皇の実母。そんな華族の矜持と誇りの中で、一八八五（明治十八）年十月十五日、燐子は生を受けた。が、実は彼女は柳原家の正妻の子ではなく、いわゆる妾腹の子だった。実母の奥津りょうの手元から生まれてすぐ手放され、幼女期は公家の習慣に従って東京・品川の海に近い家に里子に出された。麻布の柳原家に戻ったのち、八歳のころ子爵・北小路随光の養女になっている。嗣子・資武と将来結婚する約束での養子入りだった。

われといふ小さきものを天地の中に生みける不可思議おもふ

少女時代を雅やかな空気の中で育ち、素直で世間知らずの燐子が、初めて自らの運命に驚愕し悲嘆する時が来た。十五歳になろうとするその年、資武が燐子に迫り、彼女が妾腹の子であったこと、母と信じていた人が継母であったこと、そして資武が許婚に決められていたことを知らせたのだ。燐子の衝撃は



大きかった。華族女学校を退学し、ほどなく結婚、男児を得たあとも夫を嫌悪し続け、ついに五年後、子供を置いて離婚する。一九〇五（明治三十八）年のことである。

それから三年、柳原家に蟄居を命じられ、その間、近くに住む姉が差し入れる歌書や小説類、そして『源氏物語』などの古典を読み耽ったという。燦子は文学を通して時代の熱い声を聴き、学問への強い渴望を感じた。継母の反対はあったが、東洋英和女学校に入学し、三年間の寄宿舎生活を送る。卒業したのは二十六歳を迎える年だった。遅ればせの学業への専念だったが、自我に目覚めようとするその軋みを彼女は全身で実感していたに違いない。十代に一度門をたたいた佐佐木信綱の竹柏会に再び入会し、「心の花」に作品を

発表し始めたのは在学中と目される。白蓮の雅号はこのとき以来で、信仰していた日蓮にちなんだという。しかしひそかに、泥中に生い育っても汚れなく咲く白蓮の花に、自らをたとえようとする意はなかったか。

ここまですが燦子の人生の序章とっていいかもしれない。無垢の心が傷を負い、挫折を味わった上で、どう生きるのが自分にとってふさわしいか。貧しい人の味方になりたいという望みは抱いていたようだが、まだ漠然としていた。華族に生まれた女にとって、その生き方は大きく規定されるものがあつた。家事もできず、もちろん働く術もない。もうひとつの転機、それが来るまで燦子の生は迷いを重ねることになる。

富と名声の狭間で

一九一一（明治四十四）年三月、燦子は九州の炭鉱王・伊藤伝右衛門と再婚する。二十五歳年上の彼は、いわばたたきあげの苦勞人で、筑豊の石炭鉱業組合のまとめ役、衆議院議員、地方銀行の取締役などを果たした実業家の名士だった。正妻を失い、あらたに華族

の新妻を迎えるにあたっては丁重に遇しようとした。燦子は、伝右衛門が女学校創立に全

面的な資金援助をする話に興味をもち、富裕な財力をそうした社会事業に役立てられるなら、と思ったという。出戻りの肩身の狭さから逃れる契機と踏んだのも事実だろう。当時、東京に住む人々にとって九州は遠いうえにも遠かった。その福岡に嫁ぐ。生まれ育った環境や年齢を超えて。その結婚は、しかし異質な世界を双方が持ち寄った不自然さばかりが目立ち、決して噛み合うことはなかった。伊藤家の中で燦子は次第に孤立してゆく。

富はあるが、無教養で粗野な夫。伝右衛門にとうてい相容れられない馴染みがたさが燦子にはあつた。その上で夫を恐れ、孤独に送る日々を持て余す。そんな心情を思い切つて吐露することで、「心の花」に発表される歌は、やがて佐佐木信綱の目にとまるところとなる。第一歌集『踏絵』は一九一五（大正四）年三月に信綱の序文を得て刊行された。燦子、二十九歳。結婚後、五年目にあたる。

われはここに神はいづくにましますや
星のまたたき寂しき夜なり

けふの日もなほ呼吸するやふとしたる
あやまちにより成りしこの軀

月はめぐるこのわがふめる大地にわれ
てふものありとし知るや

白蓮と長男・香織



夫や周囲にどうしても適合しない自分の自分とは何か。ここには自らの居場所を探しあぐねて悩む知性のまなざしがある。歌を詠むことで自我を磨き、磨いた自我の所在に行き暮れる。また、「骨肉は父と母とにまかせ来ぬわが魂よ誰にかへさむ」からは、物心について以来、精神的な安定を知らずにきた孤の寄るべなさが感じられる。自らの問いに答えてくれるもの、そして自分の存在をそっくり温かく受け止めてくれるもの、燦子が夫に求めて得られなかった最大のものは、それらだったのではないか。

百人の男の心破りなばこの悲しみも忘れはてむか

或時は王者の床も許さじとまきしかひ
 なのこの冷たさよ

伝右衛門からは決して満たされぬものを、燦子は周辺に集まってくる文化人やジャーナリストたちに求めていった。美貌を謳われたやんごとなき身分の燦子が悲哀を込めて詠んだ歌は、さまざまな男を次々と引き寄せた。しかし戯れにも似た恋をいくつも仕掛けながら、燦子の心は醒めていた。幼くして味わった性への嫌悪感が拭えなかつたとも考えられる。また『踏絵』刊行後、夫に妾を持つよう取り計らい、寝所をとにもすることもあったという。妻妾同居を望んだ上で、夫ともほかの男とも一線を引き続ける。そこには幾重にも屈折した男への愛憎が見え隠れする。

真実の愛を求めて

一九一八（大正七）年四月、大阪朝日新聞に「筑紫の女王・燦子」が連載開始。十回にわたる記事には燦子のプライベートが虚実を交えて書き明かされ、これにより彼女は一挙に時の人となる。翌年、詩集『几帳のかげ』、歌集『幻の華』を刊行。戯曲『指鬘外道』も書かれる。それを本にすべく出版社から燦子

のもとへ遣わされたのが、同じ出版社から機関紙を出していた宮崎龍介。東大法学部出身、社会主義を研究する「新人会」リーダーだった。一九二〇（大正九）年一月、燦子は初対面で七歳年下の彼にひかれた。やがて二人の間に恋の炎が燃え上がる。

我命惜しまるる程の幸を初めて知らむ
 相許すとき

君ゆけばゆきし淋しき君あればある淋
 しさに追はるるころ

翌二年の夏、恋はひとつの成就を果たし、燦子は身籠った。訴えられれば姦通罪は免れない。燦子は恐らく伝右衛門の注意をそらすため博多の名妓を身受けし、一方、自分は十月の出走のための準備を進めた。別邸「あかがね御殿」の改築工事の押し迫ったころ、所用を兼ねての伝右衛門の上京に伴った燦子は、夫が一足先に帰るのを見送って、事を行なった。次いで燦子の絶縁状が大阪朝日新聞に掲載された。「私は今あなたの妻として最後の手紙を差し上げます」との書き出しで発表された内容は、十年間の愛のない結婚生活の不如意と、真実の愛に目覚め自由に生きることを選んだ女の、潔い決別の意志を表したものだ。実際には燦子が書いてはいなか



晩年の龍介と白蓮

ったようだが、これにより伝右衛門は大阪毎日新聞に反論を載せた。しかし四回の連載で中止。燦子が大正天皇のいどこにあたるなど政治的配慮があったともいわれる。以後、彼の口から燦子の名が出ることはなかった。

身重の燦子は束の間、龍介との生活を楽しんで、やがて謀られて柳原家に幽閉。そこで男児・香織を出産。兄は貴族院議員を引責辞職した。柳原家の恨みを負った燦子は、関東大震災の起こった一九二三（大正十二）年九月一日まで、居場所を替えながらの監禁状態を余儀なくされた。震災後、宮崎家から救援物資が届けられ、燦子を預かっていた中野家は燦子を宮崎家へ返すことを決意。晴れて親子が共に暮らせる日が訪れた。十一月、宮内省は燦子の華族除籍を発表し、燦子は平民

になる。胸の病をぶりかえした龍介に代わって、一家の支柱は燦子の筆にかかっていた。龍介の父で、孫文の辛亥革命を支えた宮崎滔天は前年に亡くなっていたが、社会主義に燃える同志、志士たちは宮崎家に常に入出入りしていた。燦子は流れる水に沿うように、その生活になじみ、新思想を吸収していった。

父ありて母ありてなほ祖母ありて愛の中なる子に涙おつ

今更のやうにかたへに眠る子をひれふ
すごときおもひして見る

血を分けた子を自らの手で慈しみ、家族で暮らすということ。その喜びは歌集『紫の梅』（一九二五〈大正十四〉年）に余すことなく歌われた。長女・路蓼子を得て、さらに歌集『流転』（一九二八〈昭和三〉年）では、息子になり代わって詠んだ「妹をまたいぢめたと叱られた大袈裟な声で泣くものだから」「まだ少し起きて居たいを寝るといふ早く大人にならなきや損だ」などの、自由でのびのびした作風を見せる。

晩年、平和を願って

ようやくつかんだ幸福が暗転するときがき

※今号の予定だった「高瀬一誌」は、筆者の大滝貞一氏のご都合により、変更になりました。

（まつだいら・めいこ「プチ★モンド」編集・発行人）

た。学徒出陣中の長男が九州・鹿屋基地で終戦四日前に戦死。知らせを聞いた燦子は、一晩で髪が真っ白になったという。翌年、NHKに出演して子供の死を悼み、平和を願う母の思いを述べる。これはやがて世界平和を希求する「万国悲母の会」へと発展。燦子は平和運動家としてその後を生きるようになった。

かへり来ば吾子に食はする白き米握る
指ゆこぼしては見つ

英霊の生きて還るがありといふ子の骨
壺の振れば音する

歌集『地平線』（一九五六〈昭和三十一年〉）は息子を偲ぶ歌を含んで、晩年の思いが志強く率直に、また味わい深く詠まれている。緑内障で六一（同三十六）年には両眼を失明するが、凜とした生き方の中にあつてその歌世界はますます澄んでいった。「月影はわが手の上と教へられさびしきことのすずる極まる」「そこひなき闇にかがやく星のごとわれの命をわがうちに見つ」。

六七（同四十二年）二月二十二日、波乱に富んだ人生の果てに八十一歳で没。龍介はその四年後に亡くなった。